

# チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州事務局  
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号  
Tel·Fax 093(681)1780

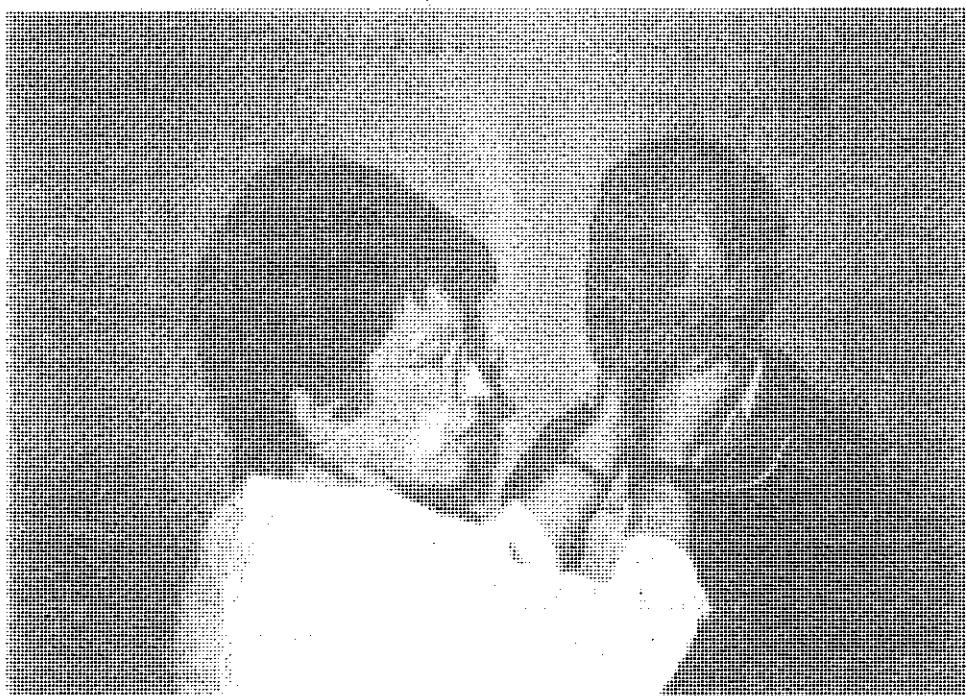
口座番号 01770-1-65328  
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1997年4月9日

No.

37

チェルノブイリ  
支援運動



キャンペーンのために来日する放射線医学センターの  
ラリサ・ダニーロバ教授

# チェルノブイリ通信No.37をお届けします

皆さんのお近くの桜はいかがですか？今年こそ運営委員で花見を！！と意気込みながら、やはりゆっくり花を楽しむまもなく、北九州はそろそろ散り始めました。

さて、ベラルーシからラリサ医師を迎えての〈「移動検診車」導入による早期診断・治療システム確立に向けてのキャンペーン〉が各地ではじまります。みなさんもお近くの会場にぜひお出かけください。

今回、支援運動の紹介と募金集めのために製作した新しいカラーリーフレットを同封しています。支援の輪を広げるために多くの人たちにこのリーフレットを見ていただきたいと思っています。お店などに置いていただけるところ、お友達・知り合いに配っていただける方、お分けしますので必要な枚数を連絡ください。

また、昨年4月にグリーンコープ生協を通して入会された新会員さんには、チェルノブイリ10年を記念して製作した感謝状を同封しています（それ以前からの会員さんには昨年送付しています）。

みなさん、引き続きのご声援、ご協力を願いします！

## 【今回の内容】

### ●「移動検診車」キャンペーン

- ・日程
- ・移動検診車の名前決定

### ●臨時総会報告

- ・新サナトリウムについて
- ・今年度の募金の種類
- ・規約改定ほか

### ●スタディツアーレポート（3回目）

### ●スタディツアーレポート集発売

### ●事務局より

……となっています。

「移動検診車導入」による  
早期診断・治療システムの  
キャンペーンが始まります！

前号でお知らせしたように、ベラルーシ国内のまだ検診を受けたことのない人たちの住む地区で甲状腺ガンなどの検診を行いそれを治療に結びつけるためのシステム《「移動検診車導入」による早期診断・治療システム》のキャンペーンが始まります。ベラルーシ側の中心となるラリサ医師が来日して、九州・山口各地で講演を行います。日程は次ページのようになっています。

## ラリサ・ダニーロバさん 講演会日程

- 4月20日(日) 午後2時～  
柳井市文化福祉会館(柳井市)  
連絡先 Tel. 0820-23-5673 武重
- 4月22日(火) 午後1時半～  
崇禪寺(大分県中津市)  
連絡先 Tel. 0979-22-5823 安部
- 4月23日(水) 午前10時～  
コンパルホール(大分市)  
連絡先 Tel. 0975-69-5908 G-コープ  
Tel. 0975-69-9942 秋月
- 4月24日(木)  
(宮崎県日向市)  
連絡先 Tel. 0982-53-9400 岩切
- 4月25日(金) 午後7時～  
宮崎市立体育馆会議室(宮崎市)  
連絡先 Tel. 0985-50-5174 山口
- 4月26日(土) 午後7時～  
アクティブセンター串間(串間市)

連絡先 Tel. 0987-72-4732 竹下

- 4月27日(日) 午後1時～  
西本願寺鹿児島別院(鹿児島市)  
連絡先 Tel. 0992-67-5744 宮路
- 4月29日(月) 午後2時～  
八代厚生会館 中会議室(八代市)  
連絡先 Tel. 0965-33-3420 松本  
Tel. 0965-35-7333 中川

- 4月30日(水) 午後6時～  
教員文化会館(長崎市)  
連絡先 Tel. 0958-47-1823 川原
- 5月1日(木) 午後6時半～  
女性センター ムーブ(北九州市)  
連絡先 Tel. 093-681-1780  
支援運動事務局

\*ラリサさんは、各地で、ペラルーシの被害状況と現状の厳しさをうつたえます。そして私たちと組んでこのシステムを確立すれば、多くの子どもたちが救われるという話をします。

### 移動検診車の愛称は「雪だるま」に決定

移動検診車の愛称募集にたくさんの応募、どうもありがとうございました。約50の中から運営委員会で話し合った結果、この移動検診車の愛称は「雪だるま」に決定しました。これはチエルノブイリ支援運動・九州が編集した子どもたちの作文集「わしたたちの涙で雪だるまが溶けた」に、ちなんだものです。「雪だるま」はペラルーシ語で“スネガビーク(SNEGABIK)”と言い、“雪の精”というような味わいのある美しい言葉です。作文にもこの“スネガビーク”が使われています。この名前はお2人の方から寄せられました。

なお、愛称を寄せてくださった方々すべてに、チエルノブイリ支援運動・九州がらささやかですがプレゼントをさせていただきます。どうもありがとうございました。  
どうぞ「雪だるま号」をご声援ください。

## 2月23日、臨時総会が開かれました

2月23日（日）に臨時総会が開かれ、以下のことが決定されました。

### ◆今後のサナトリウム（健康回復施設）への取り組みについて

- ・サナトリウム（健康回復施設）を今後も追求していくことを決定した。
- ・今までのような保養を中心としたサナトリウムではなく、手術後の子どもたちのリハビリ等、より健康回に重点を置いたものが望ましい。
- ・この施設の準備には一年かけて取り組む。
- ・名称については「サナトリウム」という言葉は、現地では「保養」、「休息」の意味で用いられているので、「健康回復施設」等、他の名称にした方がよいと思われる。しかし、今までの「サナトリウム」という言葉はなじみがあるので、募金を集める場合、今年度はそのまま使う。今後、新しい施設の名称が決まったら、それを募金名として用いる方法も考えられる。
- ・将来的には、「移動検診車導入」による早期診断・治療システムと関連づけたい。

### ◆募金の名称について

今年度は以下の募金を集めます。

#### 【チェルノブイリ医療基金】

被災者への医療機器・医薬品・食物の提供等に当てる

1口 3,000円

#### 【移動検診基金】

「移動検診車導入」による早期診断治療システム確立のために充てる

1口 5,000円

#### 【サナトリウム基金】

新サナトリウム（健康回復施設）の準備と運営のために充てる

1口 1万円

\*以上、一人何口でも結構です。分割も可能です。

### ◆ミンスク事務所開設

チェルノブイリ支援運動。九州にミンスク事務所ができました。スタッフはナタリア・クリモビッチ（ナターシャ）さんです。ミンスク外国語大学4年生。キャンペーンでは、ラリサさんの通訳として来日します。

### ◆規約改正について

次ページのように規約を改正しました。



# チェルノブイリ支援運動・九州

## 規約改訂

1997, 2, 23

### 第1章 総則

#### (名称)

- 第 1 条 本会は、チェルノブイリ支援運動・九州と称する。  
2 本会を構成する特定の地域のグループが、九州の名称の代わりにその地名を付ける  
こともできる。

#### (事務所)

- 第 2 条 本会は、本部事務所を北九州市に置く。  
2 ベラルーシ事務所をベラルーシ共和国ミンスク市に置く

### 第2章 目的及び事業

#### (目的)

- 第 3 条 本会は、チェルノブイリ原発事故の被害にあった人々の支援のために、医療援助活動を行い、被災者に対する物質的・精神的支援を行うことを目的とする。  
2 被災者に対する支援を通してお互いの連帯を強めるためにも、再びチェルノブイリの惨禍を繰り返さないための活動を行う。  
3 本会は、すべての活動を非営利で行う。

#### (事業)

- 第 4 条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。  
一 被災地の医療機関や健康回復施設に対する医薬品・医療器具の援助や資金的援助。  
二 被災地における早期診断・治療システムの支援。  
三 被害の実態の把握、援助の確認のための現地調査団の派遣。  
四 チェルノブイリ原発事故の一般への周知及び支援運動賛同者の理解を深めるための出版、講演、PR活動及び機関誌の発行。  
五 その他、前条の目的を達成するために必要な事業

### 第3章 会員

#### (会員)

- 第 5 条 本会の会員は次のとおりとする。  
一 本会の目的に賛同して総会の議決により定められた金額を納入した個人または団体。  
二 会員の資格については一切の制限を行わない。

#### (資格の喪失)

- 第 6 条 会員は、次の事由によって資格を喪失する。  
一 会員が退会届を提出したとき。または連絡の停止を求めたとき。  
二 定期間が経過しても連絡がないとき。

### 第4章 役員

#### (種類)

第 7 条 本会に次の役員を置く。

- |         |     |
|---------|-----|
| 一 代表    | 1名  |
| 二 運営委員長 | 1名  |
| 三 運営委員  | 十数名 |
| 四 事務局長  | 1名  |
| 五 事務局員  | 数名  |
| 六 監事    | 2名  |

(選任)

第 8 条 役員はすべて総会で選出する。

- 2 代表、事務局員は運営委員を兼ねる。
- 3 運営委員、監事は相互に兼任することができない。

(任期)

第 9 条 運営委員及び監事の任期は2年とし、再任を妨げない。

- 2 换算または増員により選出された役員の任期は、前任者または現任者の残存期間とする。

(職務)

第 10 条 代表は本会の会務を総理し、本会を代表する。

- 2 運営委員は、総会及び運営委員会の議決に基づき、会務を分担する。
- 3 各運営委員は、運営委員会を構成して、本会規約に定める事項のほか、総会の権限に属する以外の事項を審議決定する。
- 4 事務局は日常の会務を処理する。
- 5 監事は会計を監査する。

(顧問)

第 11 条 本会には顧問若干名をおくことができる。

- 2 顧問は、運営委員会の推薦により代表が委嘱する。
- 3 顧問は、会の諮詢に応じる。

## 第 5 章 会議

(運営委員会)

第 12 条 運営委員会は、運営委員長が召集し、月1回開催する。ただし、代表あるいは運営委員現在数の3分の1以上が会議に付すべき事項を示して召集を求めたときは、運営委員長は臨時に運営委員会を召集しなければならない。

- 2 運営委員会議に欠席せざるおえなくなった場合、その議決権は特別の意志表示がない限り代表に委任されたものとみなす。

(総会)

第 13 条 総会は、毎年1回代表が召集する。

- 2 臨時総会は、運営委員会が必要と認めたとき、代表が召集する。
- 3 総会の議長は、代表が指名したものとする。
- 4 総会は、本規約に定めるもののほか、次の事項を定める。
  - 一 事業報告および収支決算に関する事項
  - 二 事業計画および収支予算に関する事項
  - 三 財産目録に関する事項
- 4 その他、本会の業務に関する重要事項で運営委員会において必要と認める事項

5 総会の議事は、本規約に別段の定めがある場合のほか、出席した会員の過半数をもって決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

(事務局会議)

第14条 事務局会議は、本会の日常業務を処理するために開催する。

2 事務局会議の参加者については、特に制限しない。

3 事務局会議での決定事項は、運営委員会の決定と矛盾しないものとする。

第6章 会計

(基金)

第15条 本会の財政は、会員からの募金、その他の募金によってまかう。

2 募金のうち被災者への医療援助のために寄付されたものを“セルノブイリ医療基金”、「移動検診車」導入による早期診断・治療システム確立のために寄付されたものを“移動検診基金”、新サナトリウム（健康回復施設）の準備と運営のために寄付されたものを“サナトリウム基金”とする。

3 基金のうち、2割を限度として、会の運営に当てる場合がある。

(一般会計)

第16条 本会の会計のうち、通常業務に関する部分を一般会計とする。

(事業会計)

第17条 本会の会計のうち、特定の事業に対しては事業会計として分離する。

2 事業会計は単年度処理とする。

(会計年度)

第18条 本会の会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日までとする。

(監査)

第19条 本会の会計は、毎年1回監査を行う。

(連絡窓口)

第20条 本会は、各地域の会員との連携を取るために、それぞれの地域に連絡窓口を設置する。

(書類及び帳簿)

第21条 事務所には次の書類および帳簿を備えておかなければならぬ。

- 一 設立趣意書
- 二 支援運動規約
- 三 財産となるべきものの種類および総額（財産目録）
- 四 財産となるべきものの権利および価格を証明する書類
- 五 団体代表、役員の氏名ならびに役員等就任承諾書および団体代表とその代理となるものの印鑑証明書（就任承諾書一人一枚づつ）
- 六 事業所賃貸契約書
- 七 事務局職員名簿（常勤、非常勤、有給、無給の区別）
- 八 会員名簿
- 九 収入、支出に関する帳簿および証拠書類
- 十 本年度の事業計画書および過去2か年の収支報告書

## 十一 その他必要な書類および帳簿

### 第7章 規約変更及び解散

#### (規約の変更)

第22条 本会の規約は、総会において出席者の3分の2以上の賛成による議決を経るものとする。

#### (解散)

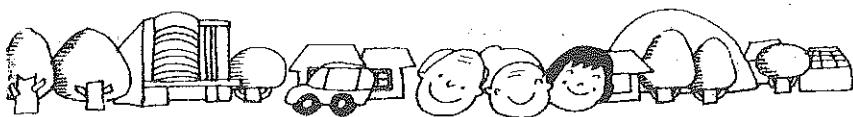
第23条 本会の解散については、総会において出席者（委任状を含む）の4分の3以上の賛成による議決を経るものとする。

2 残余財産の処分についても同様とする。

#### 付則

##### (施行期日)

1. この規約は、1997年2月23日（臨時総会の日）より施行し適用する。



## 切尔ノブイリ・レポート その3 東京都 門間 直輝(ゴスペルファミリー)

### 6日目 スタイキ

#### ピクトルとサナトリウム・九州へ

朝、足をつんづんするボリース。やっと目が覚める。まだ眠い。

居間に行くと朝食が用意してありました。ここでいただく最後の食事をほうばりながら、僕は、十字架とその祭壇に目がすいこまれていました。そこに飾っている十字架は今まで見たこと

もない十字架だったので、みんなに「こんな十字架は日本にはない！」素敵な十字架だと言って「ハラショー」を連発していました。そしたら何とその十字架をおみやげにもたせてくれました。「なんということ…」さあいよいよ家を出るぞ！というときになって、マリーヤが僕に手紙を託しました。その手紙はロシア語で意味は分かりませんでしたので、後で通訳してもらうことにしました。そして、僕も日本語の手紙と、そして英語での住所を渡しま

した。時間になり、いよいよバスにむかいます。

今日は、昨日の晩餐会には出席しなかったサーシャもいつしょで本当に一家総勢の見送りとなりました。荷物を手分けして持ってくれてゆっくりと僕のペースに合わせて歩いてくれるのでした。

途中ボリースが急に立ち止まり「こっちにおいで」と言いました。（そのように言っている気がしました）マリーヤは早く行きましょう！といった雰囲気でしたが、ボーリスはどうしても見せたいといった、かたくなな姿勢でした。そこにはドイツに虐殺されたその時の慰靈碑として、悲しそうに立っているおばあちゃんの像がありました。

ボリースの真剣な眼差しですぐにここで何が起こったか理解できました。虐殺された人々が眠っているというお墓も教えてくれました。彼は50歳過ぎていますから、戦争の時の体験があるのかもしれません。家族の誰かが亡くなつたのかも知れません。彼の目は真っ赤でした。

バスの前にたどり着くと、もう全員集合していました。名残惜しくてバスになかなか乗れません。その間に、ボーリスは僕が書いた手紙も訳してもらつたらしく、うなづきを連発していました。最後にやっぱり涙がこぼれて、リューダに別れを告げたらなぐさめてくれました。猛烈に彼女には、自分の願いが叶うことをいのるばかりです。

またここにくるんだという思いを抱きながら、それまでみんなが健康に暮らしてゆけるのかどうか心配になつて

しまうのでした。やっぱり別れというものは辛いです。

やつとバスが出発するとしばらくぶりの静けさが戻ってきました。みんなフルパワーでそれが動き回つたために、疲れ切つてほとんどの人が眠っていました。

本当に静かでした。本来の予定ではナチス虐殺の話をリューダのバブーシカに聞けるはずだったのです。リューダのバブーシカはナチスが村に来たとき森に逃げ込んで何年間か暮らし、生き延びた人だと聞いていました。だから、そんな話も聞けると楽しみにしていたのですが、予定が変更されてしまい聞けませんでした。でもそれぞのホームステイ先で聞いた話などを持ち寄つて少しの交わりを持ちました。ぜひおばあちゃんが元気なうちにお話を聞きに行きたい…そんな気持ちが滝のように落ちて、水しぶきをあげていました。

### スタイキのホテル

ずいぶんと長い時間バスにゆられていました。ホテルに着くと思いがけない友人がわざわざ会いに来てくれていました。去年東京であつたのが最後でしたから、約1年ぶりの再会！なんと《ビクトル》がそこにはいたのです。彼のお父さんもいました。

ビクトルは英語が少しできるようだったので、「僕のこと覚えてる？」と聞いたら…おおきくうなづいてくれました。

僕はすっかりうれしくって、なぜなら、まさかここで《ビクトル》に会えるとは思っていませんでしたから。きっと、彼も僕に会えると思ってはいなかつたでしょう。

色々と聞きたいことはあったのですが、とりあえずホテルにチェック・インして一息ついてからにすることになりました。

旅も終盤に近づいていました。疲れというよりも頭の中で、これからどうするべきか？頭を悩まし始めている時でもありました。

これからも風下汚染地で暮らしていくセルゲイの一家とリューダたち。そしてかわいいおばあちゃんたちの心の中に、どんよりと根をはりつつある事故の記憶。そして何よりもあの土地で生きていかなければならないであろう彼らの子ども達のことを思うと、なんとかしなければと思うと同時に、「いったいどうすればいいんだろう？」と考え込んでしまいます。それに、まだ完全に終結していないわけではない、現在も動き続ける原子力発電所の恐怖も加わります。よく「ベラルーシの未来は私たちの未来」というような考えを土地の人々は持っています。しかし、前にも考えたことですが「ベラルーシの未来は日本の未来」のような気がしてならないのです。博士も言っていたように狭い日本では逃げ場はありません。このベラルーシの人たちと同じように、【この土地で生きていく】ということにもなるでしょう。安全だと言われ続けて、その被害をもろに受けて

しまった人々。日本人とベラルーシ人とどんな違いがあるのでしょうか？

食事の後、安田さん長岡さん寺島さんと一緒にビクトルとおしゃべりを楽しんでいました。僕は、 Chernobyl 支援運動・九州の矢野さんから、手紙と鶴の《レリーフ》（手作り）を渡されました。なんでも日本の女性の方からで、 Chernobyl のことをいつも心に留めていて、今回僕たちが現地に行く際に子どもに渡してほしいのだそうです。

手紙を取り出すと、8枚ほどありました。力のこもったお手紙で、僕たちはそれをおぼろげな英語でビクトルに伝えました。ビクトルは手紙を見て「いい手紙だねえ。」と言っていました。手紙の人の気持ちが伝わったことを僕たちは確認しました。

夜も更けてきたので、僕たちは明日も会うと約束して眠りにつきました。ビクトルはまだ何日かホテルに泊まる予定だと言うことを聞きました。

## 7日目 ハティン

### 旧市街 そして希望 21へ

この日、まず初めに訪れたのは【ベラルーシ国立甲状腺ガンセンター】です。

ここには《元信州太学助教授》の【菅谷昭医師】が医療活動を行っていると言うことで、忙しい中お話を聞けることになりました。

菅谷先生は何回かこの土地を訪れてベラルーシの現状を知り、こちらに来る思いをずっと自分で温めていたようです。そして今は「とても楽な、自然な気持ち。」と言っていました。

## ハティンと旧市街

僕たちは、旧市街と呼ばれる町に行きました。そこは全面的に破壊されてしまった昔の町並みを一部、再現して建てられた町なのです。今では観光としても、また、ハティンと旧市街とセットで子ども達の平和教育にも利用されていて、毎年全国から子どもたちが訪れるそうです。

ハティンという名前だそうです。村全体がナチスの虐殺の慰靈碑となっているのです。【1943年に209の町と9200の村と223万人が殺された】という石碑がまず最初に目にとまります。家族に一人は殺されているのだそうです。

まっしぐらに大きなゆるやかな道が延びています。この石碑を越えると、亡くなつた子どもを抱えるおじいさんの像が見えます。ものすごくおつきいです。像の印象は、にじみ出てくるような暖かさがあると言つた感じでしょうか。ずーっと遠くから泣いているような優しい鐘の音がきこえてきます。もうあたり一面が村のお墓です。それぞれの村の土がガラスケースに入った形でモニュメントになっています。まるで広島の平和公園のようでもあります、【平和の火】が中央にあります。

その炎はぼわーっと燃え続けています。何ともいえない静かな雰囲気と鐘の音が一つになっているこの場所が僕はひどく気に入りました。《怒り》ではなく、心が静かになる不思議な場所です。本当にまた行きたい場所の一つとなりました。

このグリーシコビッチの名前も石碑に刻んでありました。ベラルーシは、本当に虐げられ続けている土地なんだと思います。その苦しみと痛みが消えないうちに、チェルノブイリの事故の被害により半永久的に汚染されました。それでも、誇りを持って生活していくこうと懸命になっている人たちを、原発推進国であると同時に、核の被害を受けた土地を持つ日本人である私が訪れることができたということは、いまさらですがやっぱり大変なことなんだと感じることができました。

ハティンから出るとき夜中もライトアップが可能な設備が整っていることを発見。鐘が鳴り続けているのも電氣で制御されているようでした。経済が崩壊して、自分たちが使う電氣の量だってかなり制約があるのに、(たとえばボリースのうちで、でんきはついているけれど、隣のうちで電氣を使うと、我が家の明かりが暗くなる。)このようなどころだけはしっかりとしている。日本との違いを感じざるを得ませんでした。

そして、僕たちは【希望21】の施設に行きました。この建物のほとんどがドイツからの援助によって建造されたそうで、すべて《木》で、とにかく

《木》にこだわっているようでした。たしかに素晴らしい設備で、今までの旅が前提としてありますから、そのしっかりとした設備の充実に驚かされるばかりでした。現在160人が入れるそうです。

子どもたちはみんな生き生きしていて、とても病気や具合が悪い子達には見えませんでした。子どもたちは、ここに短期療養に来てはリフレッシュ、元気になって家に戻って行くのだといいます。

ここに日本のフォトジャーナリストの広河隆一さんが代表となって動いている【セルノブイリ子ども基金】からの援助により、ミシンが届いていました。そのおかげで子どもたちに裁縫を教えることができるのだそうです。そのほかにも室内で運動できるホールであるとか、パソコンを使える教室であるとか、充実している施設でした。

代表の方のお話によれば、「ここへくる前の子どもたちは人間として尊厳を認められないような生活を送っていて、気持ちが塞がっています。しかし、この施設に来て時間を過ごすと人間としての自分を取り戻し、表情も豊かになります。」そのようなことをいっていたと思います。たしかに素晴らしい施設です。もっとこのような施設がたくさんできればいいのになあと思いました。

## 8日目 モスクワへ

### ピクトルとの別れ

朝、目覚めれば8:25!出発は8:30の予定なのに寝坊です。佐藤君がわざわざ起こしに来てくれました。急いで支度をして下に降りるとやっぱり僕が一番最後。

「ごめんなさい!!」

とみんなの前に登場。おっ、ピクトル君も来てくれています。そしてヤコベンコさんの娘ターニャもいます。彼女も昨日一緒にハティンや旧市街をまわってくれました。名残惜しいですが、また会えることを祈ってお別れです。彼らと僕たちがこれからも友達でいられるように。

別れ際にピクトルは僕のことをベスト・フレンドだと言ってくれました。もちろん、僕も同じ気持ちです。

またまた、ながーいモスクワまでのバスの旅が始まりました。平均時速100キロを超えるスピードでほとんど止まらずに、突っ走ります。丸一日かかります。こちらは信号もなければ、斜線もないで対向車がくると恐くていけません。

そろそろモスクワの近くまでやってきたぞ、渋滞に巻き込まれたので、この時間を発表会にすることになりました。一人一人の今回の旅の感想をバスの中で分かち合いました。みんなの思いは本当に素晴らしい、あの場所とあの時間とあのときのみんなでしか、同じ感覚で話せないと思われるほどイメージとは違う姿を見せてくれました。本当に貴重な体験交換でした。同じ場

所と時間にいるのに、20人いれば皆違う体験をするものなのだということが体で感じられました。

## 9日目 日本へ…

### セルギエフボサードと おみやげのルーブル

この日は、純粋に観光地をまわった感じ、まるで「カラーマーゾフの兄弟」のアリョーシャのような神学生達がたくさんいる教会とおもちゃの工場をまわり、路上の出店でお土産を購入。色々まよっているうちに時間が来てしまって、ほとんど何も買えない始末。

持っていたルーブルは空港の中まで入ってから、国外持ち出し禁止を思い

出す。なんということ！！！おみやげがお金になっちゃつていいどうしたもんだろう。

そして、長いながーい旅は終わりに向かっていきました。

空港には父と母とが迎えに来てくれて、みんなで記念写真をとった後それぞれ自分の今までの生活の場所に戻つて行きました。

### 《おしまい》

\* 背谷医師の話は、特集として後日通信に載せる予定です。



### 事務局より

毎号振込用紙を入れています。これは、事務作業の手間を省くためと、いつでも思い立った時に振り込めるように毎回入れて欲しいという要望があつたからです。すでに振り込まれた方は申し訳ありませんが、各自で処分されてください。今回から「移動検診基金」ができました。そちらの方もよろしくお願いします。

それから、こちらから送付する領収書につきましては、必要な方のみ発行させていただくことにしました。振替用紙の中の要・不要の所に○印をつけてください。

わからないことがありましたら、事務局まで連絡をお願いします。不在時は留守電にメッセージを入れたら事務局員のポケベルに転送されるようになっています。折り返しこちらからお電話をしますので、必ず電話番号もメッセージに入れてください。

## チェルノブイリ スタディツアーレポート集

# 心の中に等身大の チェルノブイリ像を求めて

チェルノブイリ放射能汚染地からの報告

## 『ベラルーシの旅』 ～森と出会いと歌声と～

発行 チェルノブイリ支援運動・九州

〒805 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開莊2号  
TEL/FAX 093-681-1780

定価 500円

チェルノブイリの子どもたちが原発事故の世界を書いた作文集、「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」が出版されてから2年。この作文集の出版に関わった若者から「現地に行ってみたい」という声が高まり、「96夏、チェルノブイリスタディツア」が実現した。その9日間の旅の出来事をまとめた報告集「ベラルーシの旅」(チェルノブイリ支援運動・九州編)が発行される。

16歳から62歳までの20名からなるツアの一一行は、8月19日にモスクワからベラルーシ共和国へバスで移動する。ベラルーシの大地に馴染んでいくにつれ、チェルノブイリ、そして旧ソ連に対するモノクロなイメージが覆されていく。「大きいのは空だけ

でなく、地上も木も月も道路もすべて大きくて、人間がとても小さく見えます。その人間の小ささがすごく自然なことに見え、自然の中で人間が住まわせてもらっているような感じを受けました」(山根真紀16)

8月20日、チェルノブイリ原発4号炉へと向かう。「それは平原の中に広々と横たわっていた。すぐ周りには菜にもない。5Km手前からその姿が見えだした。そこからは巨大な送電線が出ていた」(佐藤進一19) 続いて、強制移住後の廃墟となつたブリピヤチへ。「音もない、木々を通り抜ける風もない。鼓動も聞こえない。ゴーストタウンだ。無惨な真空地帯、一瞬脳裏をかすめた風景—核戦争後のある町の荒涼たる風景」(小峯光男53)

放射能に怯え、一方で豊かな自然に

目を奪われながら、一行は、放射能管理地域にあるグリシコビッチ村に辿り着く。そして、ここでの2泊3日のホームステイを通して、ベラルーシの土に根ざした生活文化に出会う。「ホストファミリーの人は本当に親切だった。食事の時に何度も「クーシャンシ」（食べろ）という言葉を聞いただろうか。烟を案内してくれ、収穫物を食べさせてくれもした。またそこでベラルーシの自然を見た。この森は自然だ。村人達はそこでキノコを探り、白樺ジュースを作る。人と自然がまさに共存している。（坂井英生16）

森へのピクニックやダンスパーティーなど、放射能のことも忘れてしまうぐらい楽しい時間を過ごし、最初はとまどいながら食べたキノコも平気で食べるようになっていく。が、ここでも放射能を垣間見ることになる。本来、原発や放射能とは無縁であるはずの生活空間であるだけに、戸惑いも大きい。

「森でバーベキューをした帰りにも、大友さんに『息子を何とかしてください…』と目を真っ赤にして頼んでいるボリースの姿を見ました。『えっ？ セルゲイはそんなに重くないといっていた！』」（門間直輝19）

この報告集では、それぞれの参加者が、ベラルーシの人々と語り、森の木々、菜園の土に触れながら手探りで「等身大の Chernobyl 像」を描いている。自然の描写と緑の色彩が多く、それだけに放射能の影が際だつ。Chernobyl 原発事故から11年の月日が過ぎ、放射能の影響が深刻化している今日、若者の自由奔放な報告レポートの中に将来の希望を見いだしたい。

文責 矢野宏和

(支援運動運営委員 26歳)



### 「ベラルーシの旅」の 注文について

- \* 同封の振込用紙で注文できます。振込用紙が事務局に届くまで約一週間かかりますので、お急ぎの方はあらかじめ電話またはファックスでご注文ください。
- \* 葉書、電話、ファックスで申し込みもできます。本に振込用紙を同封しますので、到着後郵便局にて振り込んで下さい。
- \* キャンペーンの各会場でも販売します。
- \* この本を預かって販売してくださる方を募集します。支払いは売れてからでけっこうです。
- \* 振込用紙で注文される方は、下記の料金表を参考にしてください。送料は実費です。6冊以上注文される方は、送料を支援運動事務局まで問い合わせていただくか、郵便料金表でお調べ下さい。

冊数	本代金	送料	計(円)
1	500	240	740
2	1000	310	1310
3	1500	340	1840
4	2000	340	2340
5	2500	380	2880

チエルノブイリ・キャンペーン

# 「移動検診車導入」による 早期診断・治療システムの確立をめざして

ラリサ・ダニーロバさんによる講演

プロフィール

## ラリサ・ダニーロバさん

医師。ペラルーシ共和国の放射線医学センター教授、内分泌専門。1995年には広島にて研修を受ける。早期診断・治療システムでは、ペラルーシ側の中心となる。

41歳。

## ナタリア・クリモビッチさん

通訳。チエルノブイリ支援運動・九州ミンスク事務所スタッフ。ミンスク外国语大学4年生。20歳。

### ●とき

5月1日(木)

午後18:30~

### ●ところ

北九州市女性センター ハープ  
(5階大セミナールーム)

北九州市小倉北区大手町11番4号  
TEL: 093-583-3939

●参加費 800円

〈託児あり。事前にお申し込みください。〉